

## DSM-5 日本語版における蠟屈症の説明について

萩原 徹也

<索引用語：蠟屈症，緊張病，DSM-5>

<Keywords：waxy flexibility, catatonia, DSM-5>

近年の緊張病（カタトニア）概念の再検討の趨勢の中で、DSM-5<sup>1)</sup>においては新たに緊張病の統一的な診断基準が示された。さまざまな矛盾や複雑性をはらむ緊張病概念を要素的、操作的に定義することの方法論的な困難さは一旦措くとしても、近年のシンプルな緊張病概念を通じて、この病像が臨床的にまれではないことが改めて認識されるようになったことは事実である。今回のDSMの改訂によって、これまで乏しかった多数例研究も促進されるものと思われる。

しかしながら、DSM-5日本語版では、診断基準と付録の専門用語集（p.826）の間で蠟屈症の解説の訳文に齟齬がみられ、診断基準の訳文は解釈に問題があると思われる。当該部分の原文と訳文を以下に示す。

診断基準：

3. Waxy flexibility (i. e., slight, even resistance to positioning by examiner).
- (3) 蠟屈症（すなわち、検査者に姿勢をとらされることを無視し、抵抗さえする）

専門用語集(原文はi. e.がないこと以外は同一)：

蠟屈症 検査者による姿勢作りに対するわずかで均一な抵抗

蠟屈症という語は術語としてやや曖昧な面があるため、用法の変遷について確認しておきたい。蠟屈症(waxy flexibility)という症状はKahlbaum, K. L.<sup>4)</sup>によって最初に記述され、flexibilitas cereaと名付けられた。Kahlbaumは「蠟のような曲がりやすさ(wächserne Biegsamkeit)」という表現を繰り返し用いており、柔軟性や可撓性を意図していたかと推測されるが、彼の記述はカタレプシーとの区別という点に関してはやや不明瞭であった。蠟屈症は19世紀末以降カタレプシーと同一視されるようになり、「蠟人形のように被動的に自由な姿勢を取らせることが可能で、不自然な姿勢であっても保持されたまま自発的に姿勢を変えることが困難」という状態を指して用いられてきた。近年はこの用法に変化がみられ、蠟屈症をカタレプシーから区別することが多くなっている<sup>2,3,6)</sup>。両者の相違点に関しては一部の文献や評価尺度に混乱が残っているものの、通常はカタレプシーが姿勢の保持を指すのに対して、蠟屈症は屈曲の際に検査者に蠟を曲げるような感触を与えるという筋トームスの特徴を指すものとして用いられている。このような用法は語義に即しており、狭義で明確であることから症候学的見地からも望ましいものであろう。

DSM-5においても蠟屈症とカタレプシーは別の項目として挙げられている。DSM-5の“slight, even resistance”という表現はNorthoff Catatonia Rating Scale<sup>6)</sup>のflexibilitas cereaの解説からの抜粋と思われるが、簡潔にすぎ誤解を招きかねない印象も受ける。参考のため、神経学者による著作ではあるが表現が類似しているPosnerら<sup>7)</sup>の記載を挙げておく。

Waxy flexibility (a mild but steady resistance to passive motion, which gives the examiner

the sensation that he is bending a wax rod)

上記の経緯を踏まえると、当該部分の邦訳としては専門用語集の訳文が適切といえよう。診断基準の訳文は「(5) 拒絶症」の項目との判別も困難であり、いずれ訂正されることが望まれる。

ちなみに、「蠟屈症」は精神神経学用語集改訂6版<sup>5)</sup>に準拠した表記ではあるが、「蠟」は電子データとして表示できない場合もあり、慣用字体を用いて「蠟屈症」とする方が好ましいように思われる。これはDSM-5の翻訳に限られた問題ではないが、やはり今後の検討が望まれる点である。

なお、本論文に関連して開示すべき利益相反はない。

#### 文 献

1) American Psychiatric Association : Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 5th ed : DSM-5. American Psychiatric Press, Washington, D. C., 2013 (日本精神神経学会 日本語版用語監修, 高橋三郎, 大野 裕監訳 : DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル。

医学書院, 東京, 2014)

2) Bush, G., Fink, M., Petrides, G., et al. : Catatonia. I. Rating scale and standardized examination. *Acta Psychiatr Scand*, 93 ; 129-136, 1996

3) Fink, M., Taylor, M. A. : Catatonia—A Clinician’s Guide to Diagnosis and Treatment. Cambridge University Press, Cambridge, 2003(鈴木一正訳 : カタトニア—臨床医のための診断・治療ガイド, 星和書店, 東京, 2007)

4) Kahlbaum, K. L. : Die Katatonie oder das Spannungsirresein : Eine klinische Form psychischer Krankheit. Verlag von August Hirschwald, Berlin, 1874 (渡辺哲夫訳 : 緊張病, 星和書店, 東京, 1979)

5) 日本精神神経学会・精神科用語検討委員会編 : 精神神経学用語集改訂6版. 新興医学出版社, 東京, p.106, 2008

6) Northoff, G., Koch, A., Wenke, J., et al. : Catatonia as a psychomotor syndrome : a rating scale and extrapyramidal motor symptoms. *Mov Disord*, 14 ; 404-416, 1999

7) Posner, J. B., Saper, C. B., Schiff, N. D., et al. : Plum and Posner’s Diagnosis of Stupor and Coma, 4th ed. Oxford University Press, New York, p.302, 2007